

所在地 宮城県大崎市田尻沼部字木戸・的場・北沢

立地環境 築館丘陵東端の標高約 20 ～ 35 m の丘陵地

発見遺構 瓦窯、瓦・須恵器窯、竪穴建物、整地層、溝

年代 8 世紀前半

遺跡の概要

大崎市田尻沼部に所在し、築館丘陵東端の低丘陵と現在は開田された旧湖沼が入り組む緩斜面に立地する（第 1 図）。遺跡の範囲は東西約 0.5km、南北約 1.0km で、窯は A ～ C の 3 地点で群をなす（第 2 図）。

木戸窯跡群は古くからその存在が知られており、昭和 33 年に東北大学が B 地点の発掘調査（文献 1・2）、昭和 49 年に宮城県教育委員会ほか C 地点の発掘調査と A 地点東側の磁気探査による分布調査（文献 12）、平成 16 ～ 18 年に多賀城跡調査研究所が A ～ C 地点（文献 16 ～ 18）の発掘調査を行っており、窯の分布や窯場の様子が捉えられている。また、A 地点東側では地下式窖窯 5 基が現状保存され、昭和 51 年に国の史跡に指定されている。

窯の分布

木戸窯跡群で位置などが把握・確認できる窯は、A 地点東側で 7 基、西側で 8 基、B 地点で 6 基、C 地点で 7 基の計 28 基ある（文献 19）。

窯は各地点とも 50 ～ 100 m 四方の範囲で尾根を挟んだ両側に向かい合うように分布する（第 2 図）。A 地点東側はあまり明瞭ではないが、A 地点西側では南西に伸びる尾根の両斜面に窯がある。B 地点は南に伸びる丘陵の東斜面に 3 基、西斜面に 3 基の窯がある。なお、宅地の造成で不明だが、東斜面では北側にも窯が存在した可能性がある。C 地点では東斜面の 2 基と西斜面 5 基の窯が近接して向かい合って分布する。A 地点西側東斜面は 7 基、B 地点東斜面は 3 基、C 地点東斜面は 5 基の窯が 4 ～ 8 m 間隔で並んでいる。両斜面でみれば各々 10 基前後の存在が想定され、大規模な操業が窺われる。

窯の構造・規模

これまでの調査でほぼ全体を精査した窯は 6 基で、A・B 地点の窯は直立式の煙道を持つ地下式窖窯である（第 1 表）。C 地点のものは焼成部半ばから先が不明だが、概ね同様と思われる。

規模は A 地点 SR3 が窯体長約 7.2 m、SR8 が 6.5 m で、焼成部の幅が 1.8 ～ 2.0 m、B 地点 SR1・2 が窯体長 6.2 ～ 6.6 m、焼成部幅が 1.4 m、C 地点 SR1・2 が窯体長 3.6 m 以上、焼成部幅 1.5 m 前後であり、窯体長 6.0 ～ 7.0 m 前後、焼成部幅 1.4 ～ 2.0 m の窯が主体とみられる。焼成部の天井高は A 地点 SR3 や B 地点 SR1・2 で側壁の様子から 1.0 m 程度とみられる。

床は C 地点 SR2 の焼成部 1 次床のみ階段状を呈するが、他は焼成部が傾斜角 10 ～ 20° 前後の平滑な床で、燃焼部との明瞭な境はなく、燃焼部と前庭部はほぼ平坦である。焼成床は C 地点 SR1 では 6 枚みられたが、他はいずれも 3 枚確認している。そのうち A 地点では SR3-3 次床で瓦、他は須恵器



第 1 図 木戸窯跡群の位置

を焼成する。一方、B・C地点のSR1・2の焼成品の詳細は不明だが、各床の遺物の大部分が瓦で須恵器は少ない点から、瓦主体の瓦陶併焼が推測される。なお、他にA地点SR3・8では燃焼部で長さ2.5～2.8m、深さ0.4m程の船底状の掘込み、SR3では焚口の閉塞や前庭部の覆屋と係わるとみられるピットが検出されている。

竪穴建物 C地点の窯から約25m南で1棟検出されている（文献18）。北側にカマドを持つ一辺約5m程の方形の建物とみられ、床面で平瓦と非ロクロ調整の土師器が出土している。近さや遺物から窯との関係も考えられるが、工房を示す明確な要素は認められない。

出土遺物（第3図）

瓦、須恵器、土師器が出土している。A地点はやや須恵器もみられるが、出土の大部分は瓦である。

軒丸瓦は全て八葉重弁蓮花文で、型番が判明するものは120・121（第3図1・2）に限られる。軒平瓦は、二重弧文511aを2/3程の大きさにした515（3）が新出したが微量で、大部分は平瓦IA類による二重弧文511a（4）が占める。丸瓦は紐巻作りのII類で、狭端部がわかるものは有段のIIB類、叩き目を残すものは大半が縄叩きである。平瓦は桶巻き作りで凹凸両面をナデ調整したIA類で、1点のみ凹面をナデ調整したID類が含まれる。隅切瓦は二重弧文511（4）、平瓦IA・ID類によるものがある。鬼板は新出の重弁蓮花文954（8）で、頭部両端が緩やかに弧を描き、重弁蓮花文950Cに近い要素を持つ。なお、重弁蓮花文950Aまたは950Bとされた内藤政恒氏が採集・紹介した鬼板（文献10）は、範傷の一致から954であることが判明している（文献19）。

そのほか、A地点で二重弧文511aの顎部に左展開の偏行唐草文を手描きする軒平瓦（5）が採集されており、陸奥国分寺・国分尼寺の軒平瓦との施文方法・文様構成の一致が指摘されている（文献6）。またB地点で採集された郷里制銘がヘラ書きされた平瓦（7）は、多賀城第I期窯跡群の実年代の一端を示す貴重な資料である。

須恵器は坏（第3図9～16）、高台坏、蓋（21～24）、鉢、高坏（17～19）、平瓶、壺（27・28）、甕（30）、盤（25・26）がある。坏は口径に対して底径の割合が大きく、体部が底部から口縁部に外傾する器形で、底部はヘラ切り後に回転削り調整するものが主体を占める。蓋は口縁部にかえりをもたず、摘みは扁平な宝珠形（21）、宝珠形（23）、リング状（22）のものがある。土師器はA地点のSR3前庭部付近に投棄された甕（30）がある。

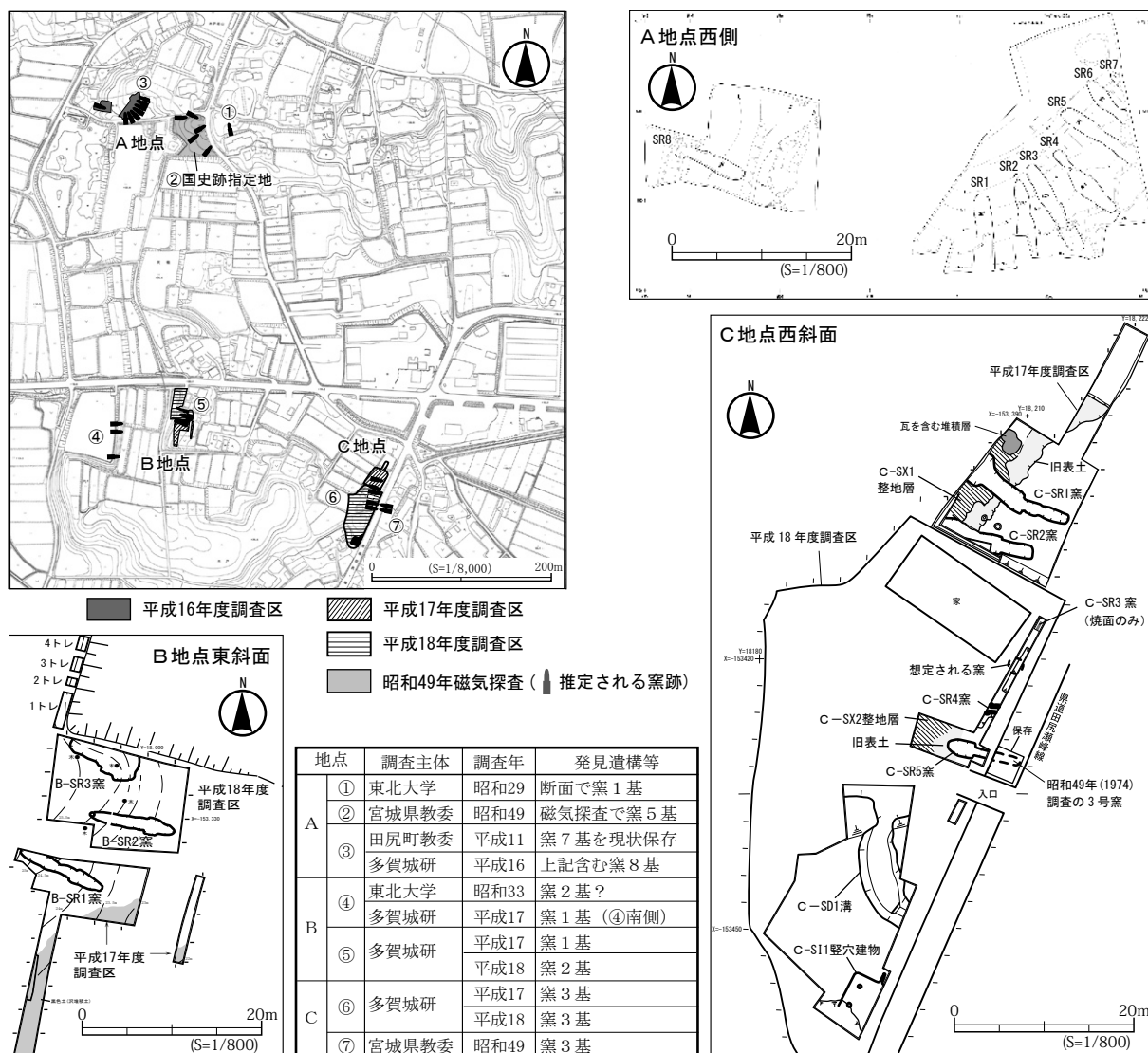
瓦と須恵器の年代は、郷里制銘文字瓦と瓦や須恵器の特徴などから、養老5（721）年～天平12（740）年前後頃で、およそ8世紀第2四半期頃と考えられている（文献16～19）。

製品の供給先 多賀城、多賀城廃寺、新田柵に瓦を供給しているほか、軒丸瓦（型番120・121）がC地点の南方約500mにある金鑄神遺跡10号竪穴建物（文献13）、本窯跡の南約11kmにある美里町一本柳遺跡の溝（文献14・15）から出土している。一方、軒平瓦515、鬼板954、埴は供給先が判明していない。また、須恵器では大崎市山畑横穴群（8号横穴）、混内山横穴墓群（7号横穴墓）出土の坏が本窯跡群の製品である可能性が高いと推定されている（文献9）。

関連文献

- 1 伊藤玄三 1961「宮城県田尻町木戸瓦窯址の調査」東北史学会 1961年春季大会資料集
- 2 伊藤玄三 1988「宮城県木戸瓦窯跡出土の文字瓦」『法政大学文学部紀要』第33号
- 3 興野義一 1961「宮城県遠田郡田尻町出土古瓦の問題点」『歴史考古』第6号 pp. 5-15
- 4 櫻井友梓 2007「多賀城創建期の須恵器」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室須藤隆先生退任記念論文集刊行会
- 5 進藤秋輝 2004「多賀城創建期の造瓦活動」『考古学の方法』5
- 6 菅原祥夫 1996「陸奥国府系瓦における造瓦組織の再編過程（1）」『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』

- 7 田尻町歴史編纂委員会 1982『田尻町史』上巻
- 8 田尻町教育委員会 2001「木戸瓦窯跡」『新田柵跡推定地3ほか』田尻町文化財調査報告書第5集
- 9 辻秀人 1984「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究』第1巻 考古学篇
- 10 内藤政恒 1961「宮城県木戸瓦窯址の鬼板片」『歴史考古』第6号 p16
- 11 野崎 準 1974「東北地方における須恵器生産」『東北文化研究所紀要』第6号
- 12 宮城県教育委員会 1975「IV(4)木戸瓦窯跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年分)』宮城県文化財調査報告書第40集
- 13 宮城県教育委員会 1992「金鑄神遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第150集
- 14・15 宮城県教育委員会 1998・2001『一本柳遺跡Ⅰ』『一本柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第178・185集
- 16～18 宮城県多賀城跡調査研究所 2005～2007『木戸窯跡群Ⅰ』『木戸窯跡群Ⅱ』『木戸窯跡群Ⅲ』多賀城関遺跡発掘調査報告書第30～32冊
- 19 吉野 武 2017「多賀城第Ⅰ期の瓦窯跡の特徴と変化」『第43回 古代城柵官衙遺跡検討会 資料集』

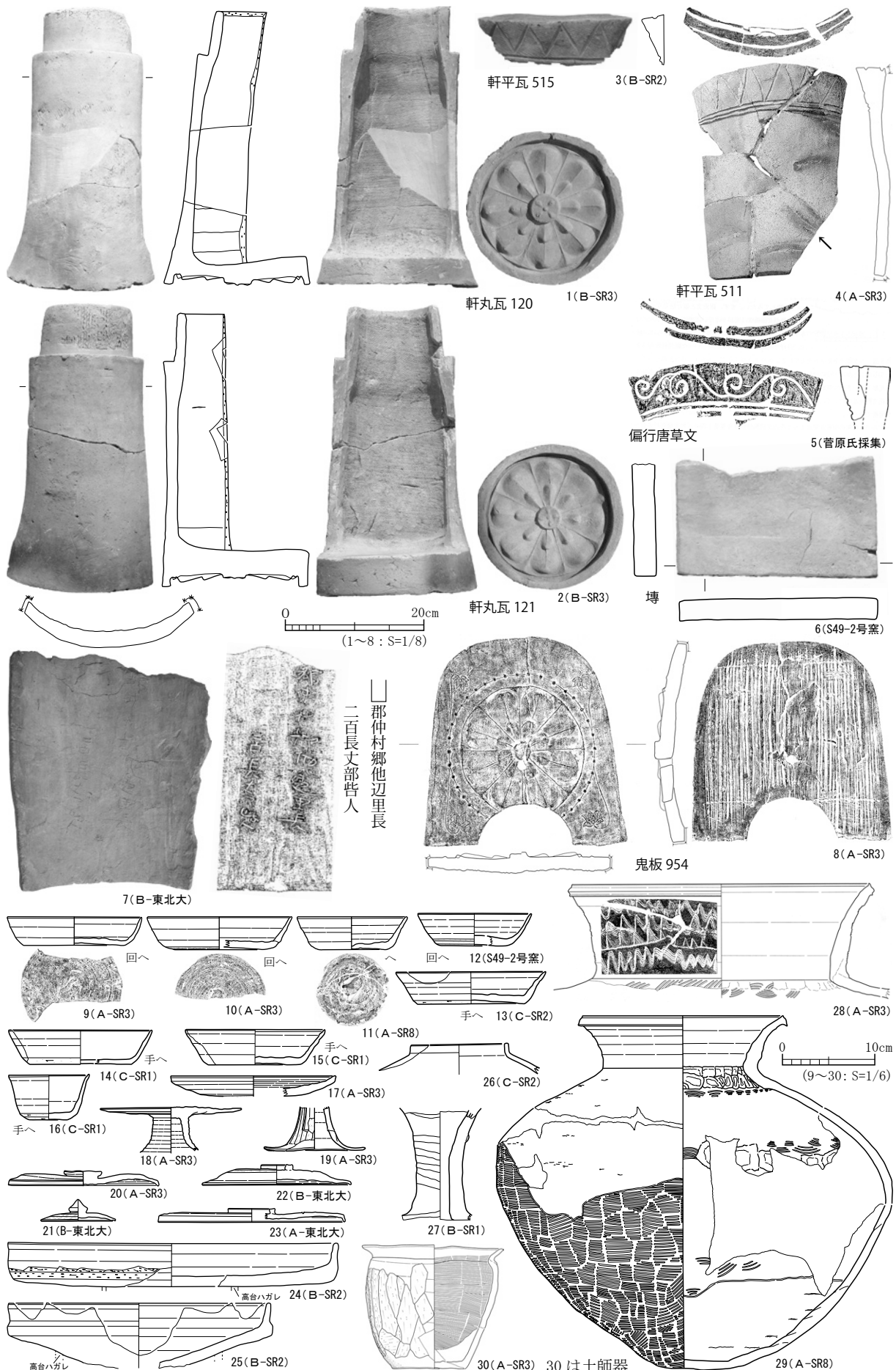


第2図 木戸窯跡群の遺構配置図(文献14・16から作成)

地点	遺構名	構造	煙道	全長	焼成部				燃焼部				窯体長	前庭部		製品	備考
					長さ	幅	床面	傾斜	長さ	幅	床面	傾斜		長さ	幅		
A西	SR3	地下	直立	11.1	4.5	1.8	3	17°	3.3	1.4	3	平坦	7.2	3.3	2.0	瓦・須恵器	焚口付近と前庭部周辺に柱穴と柱列、燃焼部に船底状の落ち込み
A西	SR8	地下	直立	(8.6)	4.4	1.8	3	18°	2.1	1.1	3	平坦	6.5	(1.7)	1.8	須恵器	側壁補修、燃焼部に船底状の落ち込み
B	SR1	地下	直立	10.2	4.7	1.4	3	15°	1.8	1.4	4	平坦	6.6	3.6	1.9	瓦	側壁補修
B	SR2	地下	直立か	9.5	4.6	1.3	3	10°	1.6	1.0	3	平坦	6.2	3.3	2.1	瓦・須恵器	側壁補修
C	SR1	地下	—	(7.6)	(3.2)	1.4	6	15°	2.1	1.4	6	窪む	(5.8)	2.6	2.1	瓦・須恵器	側壁補強、排水溝有り
C	SR2	地下	—	(5.2)	2.0	1.4	3	15~20°	1.7	1.4	4	窪む	(3.6)	2.2	—	瓦・須恵器	焼成面階段状、側壁補強

※長さの単位：m。()は残存長。床面の傾斜等は1次床で記載

第1表 窯の構造と計測値(文献14～16から作成)



第3図 木戸窯跡群出土遺物 (文献16・18から作成)